

## 荷物送りのいま・むかし

新生活のための家具や調度品などを、女性側が新居に運ぶのが「荷物送り」。かつて嫁入り道具を挙式当日に送り出すのがしきたりだった頃は、重要な儀式の一つとされていました。

### ◆かつては荷の多さが重要視された！

その昔、荷物送りは「ガモツ(賀物?)オクリ」と言われていました。これに対し、荷物がなく、身体だけで嫁入りすることを「たたきっぱなし(群馬県)」「サルマワシ(奈良県)」などと言ったようです。サルマワシとは、風呂敷包み1つだけの花嫁のこと。同様に大阪地方では、質素な荷の花嫁のことを「大神楽」と呼んだようです。

### ◆減少する、儀式としての荷物送り

しきたりとしての荷物送りの手順は、新婦の親戚の男性に荷宰領をお願いし、荷物と共に荷目録(目録書)を新居まで運ぶというもの。荷宰領は新郎に荷目録を渡し、荷預かり書(受書)を受け取ってから、再び新婦側に報告に向かっていました。

最近では、荷物送りをする場合でも父親や新婦本人が責任者になることが多いようです。また購入した店から新居に直接届けてもらい、身の回りのものや小物だけを双方の実家から運ぶケースも増えています。

### ◆目録書と受書の書き方

正式な荷物送りでは、目録書と受書が交わされます。目録は、嫁入り道具は夫が自由にできない妻の財産である証拠。贈り物ではないため、基本的には宛名は書きません。用紙は奉書が美濃紙を2枚重ねにして用い、さらに同じ紙質の紙でそれを包んで、表に「荷物目録」「道具目録」と書きます。受書も同じ紙を使い、荷物目録の内容通りに書き、最後に「右受納いたしました」と結びます。

### ◆地方では仲人が立ち会うケースも

昔ながらの荷物送りでは、仲人が立ち会いを頼まれることもあります。頼まれ仲人で、その地方のしきたりがわからない時は、依頼主(男性側の親)に尋ね、それに従います。ブラックスーツか略礼装程度の装いで、荷物送りに対してのお祝いの言葉を述べ、お酒か御祝を包んで贈ります。荷宰領から目録と鍵を渡されたら、荷と目録を照合し新郎に「○○様のお荷物をお預かり下さい」と渡します。新郎が書いた荷預かり証を荷宰領に渡し、「お役目ご苦労様でした。確かにお嬢様のお荷物、大切にお預かりいたします」と挨拶します。その後は酒肴のもてなしを受け、「おめでとうございます」の挨拶をして辞去します。

### ◆家族にお土産を贈る

地方では荷物送りに際し、家族の人たちにお土産を送る習慣も残っています。

土産品は白布地、反物、扇子などが多いのですが、今日では父親にネクタイ、母親に帯じめ、妹にハンドバッグ、弟に万年筆など一般的な物を贈る傾向にあるようです。

土産品には紅白の水引を掛けて「寿」と記し、左上に父上様、母上様などと書き、下に花嫁の名を書きます。

### ◆地方色豊かな荷物送りの呼び名

全国的には「荷物送り」「荷出し」などと呼ばれていますが、地方によっては様々な呼び方があります。

## 荷物送りの呼び方

長野県 荷送り・荷物納め  
岐阜県 荷物納め  
三重県 道具納め・荷物納め  
淡路島 荷入れ

和歌山県 荷入れ・荷出し・荷物納め  
徳島県鳴門市 道具入れ  
愛媛県松山市 道具送り  
佐賀県 道具入れ・荷入れ・たんす入れ

## 荷物送り Q&A

### Q. もらったお土産は、いつ中を見るの？

A. 荷物と共に送られてきた土産は、嫁入り道具と共に並べておきます。そして式を済ませた後、花嫁の手からそれぞれの家族へ手渡します。